その後暑い夏となつてから、それをためしてやらうと思つた文帝は、殊に暑いやうな日を見がけて平叔を召びました。そして熱い湯に入れた餅の御馳走をしました。平叔は暑い時は熱いものを食つたのですから、ぽろ〳〵と玉のやうな汗を流し、遂に布を出して顔をふきました。

文帝はどうかと、目をはなさず平叔の顔を見てゐましたが、汗をふいても顔はもとの通り白く、却つて美しい位に見えたものですから、文帝ははじめて、その白いのは白粉のためでないといふ事を信じたといふことです。

▼武陵桃源。

支那の書物にこんな事が書いてあります。

武陵といふ所に一人の漁師がありました。いつもの通り河へいつて魚をとりだん〳〵と河に沿うて上に上り、山の中へ入つて行きました。かまはずにずん

ずん溯つて行きますと、今までどれ程舟を漕いで來たか、家からどれ程離れて居るか、まるでわからぬやうになつてしまひました。暫くすると桃の林に出て來ました。岸の両側には幾町も〳〵つゞいて、美しい花が咲き揃つてゐて、他の木などは一本もなく、美しい花びらはひら〳〵とそよ吹く風に散り、よい香は心を醉はすやうに思はれます。漁師は不思議な事だと思ひながら、なほ進んで行きますと、桃の林はなくなつて、川の源のある一つの山がありました。その山に小さな入口があつて、中の方が明るいやうでありますから、漁師は舟を捨てゝおいて入口をくゞつて、中へ這入りました。初めの中は大層狹くて、やつとの事で人が通れる位でしたが、二三十歩も行きますと、俄に廣々とした平たい所へ出て來ました。そこには美しい土地もあり桑や竹などがよく繁つてゐて、あちらこちらには鷄や犬の鳴聲が聞こえてゐます。あちらこちらにゐる人は丁度外國人のやうですが、皆樂しさうにしてゐます。その人らは漁師を見て

大層不思議に思ひ、

『あなたは何處からお越しですか』。

と尋ねますから、漁師はわけをいふと、その人たちは家に連れて歸つて、酒を出したり鷄肉を出したりして、大層御馳走をしました。そのうち、村の人は珍らしさうに尋ねて來て、いろ〳〵な話をします。

『私たちは秦の世に、戰爭が起つて騷がしかつたので、家内の者や村の人と共にこゝへ逃げて來たきりで、外の人とはまるきり離れてしまつたのです。一體今は誰れの天下になつてゐるのです』。

などと問ふ者があつて、その時の支那の樣子などは少しも知つてゐません。漁師はくはしく話してやると、その人たちは如何にも呆れたやうな樣子で聞いてゐました。二三日こゝに居てから漁師はその家を辭して歸りました。歸つてからその郡の役人にこの事を話しますと、役人は不思議に思つて、人をやつて

其處へ行かせようとしましたが、道に迷つて行く事が出來ませんでした。

この事から、樂土仙境のことを桃源とも、武陵桃源ともいふやうになりました。

▼河豚は食ひたし命は惜しゝ。

河豚は味がよくて、中々うまいものですが、それには毒があつて、中毒すれば命をすてゝしまはねばならぬことがあります。それですから、命は惜しいに限つてゐますが、又うまい河豚のことですから一口食ひたくもあつて、どちらへ定めてよいかといふ所なのです。

人が世の中に立つて行くには、目の前の事ばかり考へて居らず、後々の事を考へなければなりません。それですから、たとひ目の前の利益といつても、そのために後に大した害になるやうな事なれば、よく判斷して、止めねばなりま

せん。たゞ目の前の事にばかり氣を奪はれて、後々の事を思はぬやうでは、遂には世に立つて行くことが出來なくなります。

▼武士の子は轡の音で目を覺まし、商人の子は算盤の音で目を覺まし、貧乏人の子は錢の音で目を覺まし、乞食の子は茶碗の音で目を覺ます。

武士の子は常に武術に心がけてゐるし、商人の子は商業の方に心がけてゐるし、貧乏人の子は金儲けのことばかり思つてゐるし、又乞食の子は食物の事ばかり氣にかけてゐるから、かういつたのです。

▼嫩にして絶たざれば斧を用ふるに至る。

小さな木の苗が、種から生え出た時にはまだ柔かく小さくて、爪ででも切れ

てしまひますが、大きくなるまで捨てゝおいた時には、大きな斧を用ひなければ伐ることが出來なくなります。

すべての事がこの通りで、惡い癖なども、はじめのうちに直してしまへばすぐ改まりますが、その癖をすてゝおいて長らくすると、おしまひには餘程辛苦をしてもなほらぬやうなるものです。それですから何事にかざらず、初めのうちにうまく處置しておかねば、後悔するやうな事が隨分あるものです。

▼太いものには呑まれよ。

勢のある者や、自分より目上の人には、役にもたゝぬ事にさからつたり、氣に入らぬ事をいつたりせぬやうにするのが身のためだといつたのです。世の中にくらして行くには、これが最も安全な仕方です。いらぬ事に、目上の人に逆らつてゐると、遂には身の不幸になるやうなことがあります。

▼平家を亡ぼす者は平家。

『をごる平家は久しからず』といはれた通り、一時は飛ぶ鳥もおとさんばかりの勢をもつた平家も、遂にはおごりになれて武藝もたしなまずにゐたために旭將軍源義仲のためにさん〴〵破られ、遂には源九郎判官義經らのために、破りにやぶられた末は、壇の浦に全く滅ぼされてしまひました。これももとは何かといへば、平家が奢つて來たためで、我れと我が身をほろぼしたのです。この通り自分を亡ぼすのは自分であるといふ事をいつた諺です。

自分の家を榮えるやうにするも、衰へさすのも、それは皆、自分一人の仕方で、どうにもなる事ですから、よく考へて、身の行ひを修めて行くのが大切です。

＊　＊　＊　＊　＊

▼瓢箪から駒が出る。

思ひもよらぬ所から、思ひもよらぬ事の出るのをいひますし、又面白半分にいつてゐた事から事實になつたりするやうなのを、瓢箪から駒が出るといふのです。

▼蛇となつて金を守る。

昔或る所に大層よく働く人がありました。この人は錢をためる事が好きなので、いつも破れかゝつた着物を着、粗末な食物をたべ、難儀をしてゐる者を見ても少しも助けてやらず、たゞ働く事ばかり一心になつて、その儲けた金は遣はずにためておきました。

そのうちに此の人は病氣にかゝりました。それでこの人は、他人に盗まれぬ

やうに錢を瓶に入れて、地の中へ埋めておきました。そのうちに此の人はどう
どう死んでしまひましたが、死んでからその魂は、いつも瓶の傍へ來て、かく
しておいた錢の番をして居つたといひます。

この作り話から、吝嗇でひどく錢を大事がるのを『蛇になつて金を守る』と
いふのでせう。

▼瓢簞で鯰押へる。

鯰といへば鰻と同じやうにぬるぬるした魚で、手で押へても直ぐ辷つてしま
ふもの、瓢簞といへば、丸くて引さかゝるやうな所は一つもないもの、このぬ
るぬるした鯰を、丸い瓢簞で押へようとした所が、ぬるぬるすべつてしまつて
とても押へる事は出來ません。それで、要領を得ぬ事を、いつて何をいつてゐ
るかわからず、つかまへ所のない事をいふのを、瓢簞で鯰を押へるやうだとい

ひます。

▼細うても樫の木。

形が小さくても品質のすぐれてゐるといふ事を、樫の木が細くても強いのに
たとへていつたのです。

▼棒ほど願うて針ほどかなふ。

昔毛利元就が七つ八つの頃、下男に負はれて嚴島の社にまゐつた時、下男に
向つて、

『お前は宮さまへまゐつて何をたのんだの』。

といつて、たづねますと、下男は、

『あなたが安藝全國の領主になられるやうにたのみました』。

と答へましたので、幼い元就は、

『なぜお前は、私が日本全國の領主になるやうにたのまないのだ。諺にも棒ほど願うて針ほど叶ふといふではないか』。

いつて、機嫌がわるかつたので、下男はその志の大きいのに感心したといふ話があります。

かういふ風に、自分が出世しようなどと思へば、餘程の意氣ごみで、大きな志をもつて、その方向に進んで行かねばなりません。はじめの願が棒ほであつても、しまひには針ほどしか仕遂げられぬといふ事はずゐ分あります。

▼譽める人には油斷をするな。

人をほめたり、追從をするやうな人は、心の惡い人が多いから、さういふ人には油斷をするなといつたのです。

▼蒔かぬ種子は生えぬ。

誰れでも種子を蒔いておかずに、早く生えればよいがと思つて待つ人はありませんが、世の中にはかういふ事が隨分あります。

ふだん餘り勉强もしておかずにゐながら、試驗にうまくやりたいと思つたり一心に仕事をしてもおかずに、たゞ財產を多くこしらへたいと思つたり、骨折らずにゐて一儲けをやつて見ようと思ふやうな人は、皆蒔かぬ種からよいものが生えればよいがと、待ちこがれてゐるのと同じことです。

立身出世がしたい、學者になりたい、大財產家になりたいといふ人は、まづ骨をりといふ種子を蒔いておいて、それからよく手入れをして行かねばなりません。

＊　＊　＊　＊

▼曲れる枝には曲れる影あり。

枝が曲つて居れば、その影もきつと曲つて映るし枝が直ぐなれば、その影の直ぐいのはきまつてゐます。世の中のこともこの通りで、自分がよい事をすれば、きつと後にはよい報が出來てくるし、惡い行ひをすれば、きつと後にはわるい報が出て來るといつたのです。

▼馬子にも衣裳。

馬子といふのは馬を引く人で、身分もいやしければ又多くは貧しい人です。その馬子でも、よい衣服をきせたなら、立派な人のやうに見えるといふ事をいつたのです。

人は如何によい物を着てゐようが、又如何に價の高いものを佩いてゐた所が

肝腎の身に價がなければ役に立ちません。衣裳ならば金さへ出せば、どんなよいものも買へますが、身のねうちといふものは、金を出してもどうしても俄には得られません。こゝがほんたうの人間のねうちといふ物ですから、着物などには氣をかけず。この身のねうちを上げるといふのが必要です。

▼參る所の多きに山上參り、食べ物の多いに河豚汁。

山上參りといふのは、大和の大峰山へ參るので、嶮しい所を通つたり、きつい所を上つたりして非常に難儀なのです。又河豚汁といふのは河豚でたいた汁で、時に毒にあたつて命を失ふやうな事があります。それでいつた諺で、參る所がたくさんあるのに、好んで山上參りをしたり、食べ物は色々あるのに、命を失ふやうな事のある河豚汁をくたりして、常の道にはづれた奇行をするたとへです。

▼孟母機を斷つ。

孟子といへば誰知らぬ名高い支那の賢人ですが、この孟子は三歳の時に父が無くなつてしまつたものですから、それから後は母の手一つで育てられました孟子がだん〳〵大きくなつて、家を去つて學問に出ましが間もなくぶらりと家へ歸つて來ました。丁度その時お母さんは機を織つてゐましたが、孟子の歸つて來たのを見て、

『學問はどれ位進んだのか』。

とたづねました。孟子は、

『別段進みもしません』。

と申しました。するとお母さんは怒つたやうな顏つきをして、傍にあつた刄物をとつて、織りかけてゐる機をぷつつり切つてしまひました。孟子は大層び

つくりして、そのわけを問ひました。するとお母さんは、形をあらためて、

『お前が今學問を止めて歸つて來たのは、丁度私がこの機を切つてしまつたやうなものです。この機はもうこれきり役に立たぬものになつてしまひますが、お前はどう思ひます』。

といつて、それからくれ〳〵も言つてきかせました。孟子はこれからは大層勉強をして、後には立派な人となりました。

▼孟母の三遷。

これも孟子のお母さんの話ですが、孟子のお母さんは、孟子を育てるのに、色々と氣をつけました。はじめその家が墓場の近くにあつたものですから、孟子は度々葬式などを見るので、友だちと一緒に遊ぶ時には、いつも葬式ごとをして、人を埋めたり、念佛いつたりするやうな事ばかり眞似てゐました。お母

さんはこれを見て大層心配をし、

『こんな墓の近くは子を育てるによくない』。

と思つて、直ぐに家を變りました。こんどの家は町でしたので、孟子は毎日商賣の事を見てゐるものですから、今度は子供を集めて來て、品物を賣り買ひする眞似などばかりして遊びました。お母さんはこれを見て、又もや、

『こんな處はいけぬ』。

と思つて、こんどは、學校の近くへ遷りました。所が何分家が學校の近くにあるものですから、孟子は子供と遊ぶ時にはいつも學校事をし、禮儀作法の稽古をしたり、勉强ごとをしたりするものですから、お母さんは大喜びで、

『こゝこそ子供を育てる所である』。

と思ひ、とう〳〵そこに長らく住んだと言ふ事です。

孟子が後に大賢人となつて、人から敬はれるやうになつたのも、お母さんのお蔭が大層あつたといふ事はこれでもわかります。

▼身を漆し炭を呑む。

仇を討たうと思つて苦心する事をいひます。この事の起りについて面白い話があります。

昔支那に豫讓といふ人がありました。この人は智伯といふ人の臣でしたが、智伯が襄子といふ人のために亡ぼされたので、どうかして主人のために仇を討つて襄子を殺さうと考へてゐました。

或る時豫讓は、罪人の風をして襄子の城の中へ入つて、懷に劍をかくしておいて厠の壁をぬつてゐました。これは襄子が厠へ來た時にその劍でさし殺さうと思つてゐたのです。處が不幸にも襄子に見つけられましたが、襄子もよく譯のわかつた人ですから、義理に堅い者だといつて許してやりました。それでも

豫讓はまだ仇をうたねばならぬと思つて、こんどは身體に漆をぬつて癩病のやうに見せかけ、又炭を呑んで啞となりました。そして自分の家へいつて買物をして見ましたが、妻はその人が豫讓だとは氣がつきませんでした。又道で友だちに出逢つても誰れも知つてゐません。これならば別條なしと思つて時をうかがつてゐますと、襄子が或る日外へ出かけました。時こそよしと城の近くの橋の下にかくれて待つてゐますと、襄子はそんな事は少しも知りませんから馬に乘つてずん〳〵やつて來ました。處が橋の上まで來ますと、馬が少しも進みません。襄子はをかしな事だと思つて、橋の下を見ました所が、果して豫讓が劍をもつて隱れてゐたものですから、とう〳〵これを殺してしまひました。

この話から、仇を討たうと思つて辛苦することを『身を漆し炭をのむ』といふやうになつたのです。

＊　＊　＊　＊　＊

▼味噌の味噌くさきは上味噌にあらず。

味噌の味噌くさいのは、眞の良い味噌でないのとおなじく學者であつて學者がほをし人に自慢をしたりなどする者は、まだ眞の學者ではありません。すべてその道にほこるやうな人は、眞にその道に達して居る人でなく、眞にその道に秀でゝゐるやうな人は、自慢もせねば高ぶりもせぬものです。

▼見ざる聞かざる言はざる。

世をのがれて隱遁することをいつたのです。即ち人の惡い所を見ず、聞かず言はざることをいふのです。

歌に、

善きことは見ても聞きても惡しき事

見ざる聞かざる言はざるぞよき

といふのがあります。

又『見猿言猿聞猿』といふのは庚申塚の前にある三疋の猿の名で、前の諺の意味をあらはしたものです。この三疋の猿の畫の賛に、

見ず聞かず言はざる猿よりも
思はざるこそまさるなりけれ

といふのがあります。

▼水鏡を見ると愛嬌が落ちる。

これは井戸などをのぞくと危いから、子供にそれをのぞかさぬやうにいつたのでせう。

昔からのいひつたへに、高野山に水鏡の井戸といふ井戸がありまして、これ

に顔を映して見て、若し顔の映つたのが水の中に見えればよろしいが、もしも映らぬやうなことがあれば、その人は一年中に死ぬといつてゐたさうです。

▼水は方圓の器にしたがふ。

人は善惡の友によつて、自分も善くなつたり惡くなるといふのです。

水は四角(方)を入れ物に入れゝば四角な形になりますし、圓い入れ物に入れれば圓くなります。人もこれと同じやうに、心や行ひのよい友だちとつき合つて居れば、いつの間にか善い人となりまするし、心や行ひの惡い友だちと交つて居れば、知らず識らずの間に惡い人となつてしまひます。友だちを選ぶといふ事は實に大切なことです。

▼見ぬ化物に膽をつぶす。

世の中に化物が居るとか、幽霊が出るとか、いろ〳〵いひますが、そんなものゝあらう筈はありません。それに、やれ狐の化物が出るの、狸の化物がゐるのと色々恐ろしがつて、夜外へ出るのをいやがつたり、山路を通るのを恐ろしがつたりする子供が随分多いものです。垣の上からぶら下つてゐる瓢簞を見て化物だと恐ろしがつて友だちの家へにげこんだ人などは、この諺にいつたやうな人です。こんなに臆病なことではなりません。

▼娘一人に七蔵あけた。

親が子をそだてゝ行くには實に一通りの事ではありません。子が生れた時から大きくなるまでに、その心配なこと、難儀なこと、それは實に口でいはれぬことです。殊に女の子などは、やつと大きくして一人前の者とすれば、早や嫁入の仕度をして、たくさんの金を入れねばなりません。嫁入の費用もまた、思

ひもかけぬ程大きいもので、そのために、家の財産の幾分をへらすといふやうな事さへする人があります。この諺はその費用の大きいのをいつたので、娘一人をそだて上げて嫁入させるまでに、家の蔵七つを空にしてしまつたといふのです。

▼紫は朱を奪ふ。

朱の赤い色が、紫色のために紫になるやうに、悪の感化する力のつよいことをいつたのです。

『朱に交れば赤くなる』といふのもこれと同じ事なのです。それで友と交るにもよく氣をつけて悪友と交らぬやうにし、又悪いものは見たり聞いたりするやうな事がないやうに氣をつけねばなりません。知らぬ間に悪い方にうつつてゐるといふ事は随分あるものです。

▼飯粒をこぼせば盲になる。

一粒の飯も、もとは百姓が汗水ながして働いてこしらへ上げたもの、その一粒の飯が、はじめ苗代に籾をまかれてから、御飯になつたまでの人々の辛苦といふものは、どれ程かわかりません。その飯を、たとひ一粒だからといつても粗末にしてはならぬといふ所から、かういつたので、何も飯粒をこぼしたからとて盲になりもしませんが、御飯を大切にするやうにかういつたのです。

▼盲人蛇におちず。

古人が『法を知るものは恐る』といつて、法律規則を知つてゐるものは、それをおかせば罪になるから、その行ひをつゝしみ、道理にはづれた事をすれば天道にそむいて罰があたるといふ事を思つて、わるい行ひを恐れます。これに

反して、何事もわけのわからぬものは、怖ろしいものも怖ろしがらぬといふことを、盲が、蛇に出逢つても、どんなものか知らぬから恐ろしがらぬのにたとへたのです。

▼蘘荷を食へば馬鹿になる。

蘘荷に似たものに生薑といふ者があります。生薑といふ名はせか（『背か』といふので『男か』といふ意味）と云ふ語が長くなつたもの、蘘荷といふのはめか（女か）といふ語が長くなつたといふ事です。又一つの説に、この蘘荷の古名のめかといふのは芽香で芽がかをるといふ意味から出來た名だともいひます。それにどんな間違ひからか、こんな話がつたはつてゐます。

佛教で名高い釋迦の弟子に般特といふ人がありました。この人は大層もの忘

れをする人で、何を聞いても直ぐ忘れてしまひ、自分の親や兄弟の名は勿論、自分の名さへも直ぐ忘れてしまつてゐました。それで自分の名を書いた札を首にかけてゐたといはれてゐます。この人が死んでから、その墓にまだ見た事もない草が生えました。それでこれに名荷といふ名をつけたのです。なぜかといふと般特は名を荷つてゐたといふ所から、名荷と名づけたのです、又の名を鈍根草ともいひ、これを食ふと物おぼえが大層わるくなるといつてゐます。

こんな事は全く作り話ですが、この話から『蘘荷を食へば馬鹿になる』といひかけたのでせう。

▼元の木阿彌。

織田信長と同じ時代に、大和國の郡山の城主に、筒井順昭といふ人がありました。この人、二十八歳の時に病氣にかゝつて、最早いつ息が絶えるかわからぬやうになつて來ました所が、この人に一人の子があります。伊賀守定次といつて、後に順慶といひましたが、この時年が僅かに一歳でありました。戰國時代の事とて、世の中は常に騷がしく。この郡山の城もいつ攻られるかも知れぬそれに自分が死んでしまつた日には、きつと弱みにつけ込んで攻めに來るに違ひないと思つたものですから、死ぬ前に、

『おれがなくなつたと聞いたら後に殘つてゐる定次はまだ赤兒の事であるから、きつとこの城を攻めに來る者があるだらう。それで、おれがなくなつてもその事は誰れにも知らさぬやうにせよ』。

といつて、順昭は死んでしまひました。

城にゐる者どもは、この遺言によつて、順昭の死んだ事は隱しておきましたが、餘所から使が來た時などに、城主順昭となつて面會するものがありませんから、どうすればよいかと、いろ〳〵考へてゐました。所が木阿彌といふ盲人

があつて、この人の聲は順昭の聲とよく似てゐたものですから、この人に順昭の着物を着せて、ほの暗い所に居らせ、順昭は病氣であるかのやうにしてゐて、他國から來た使に逢はせてゐました。それで順昭が死んだといふ事は誰れも知りません。その中三年ぢかくたつて、定次が三歳になつた時、はじめて順昭が死んだ事を知らしました。そこで之れまでは城主順昭のやうになつてゐた旨の木阿彌は、又もとの木阿彌になつてしまひました。

この話から起つた諺で、身分が賤しい者や、貧乏なものが、俄に立身出世して富貴の身分になつたのが、又もやしくじつてもとの賤しい貧しい者となつてしまつたりするのを『元の木阿彌』といふやうになりました。

▼山に千年海に千年。

世の中の經驗を十分つんで來て、惡がしこく廻つてうまくやつて行く人をい

ひます。小蛇は山に千年と海に千年と住んで居れば龍になれるといふ話から出て來たのでせう。

▼猛虎籠にある時は尾をふつて食を求める。

虎は深い山などに居れば、多くの獸は恐ろしがり、時には人を食ふやうな事も度々あります。それにその勢の強い虎が檻の中へ入れられてゐる時には、どうする事も出來ず、却つて尾をふつて食べ物をほしがるといふ事で、英雄豪傑といはれるやうな人も、おちぶれてしまへば人の憐をこはねばならぬことをいつたのです。

▼餅腹三日。

餅は消化のよくないものですから、餅を食つておくと三日ばかりも腹がへら

ぬといふのです。

▼餅は餅屋。

何事でも、専門にやつてゐるものは、その事にくはしく、又上手であるといつたので、餅はやはり餅屋が上手だといふのです。

▼鵙勘定。

或る日、鵙と鵲と鳩とがよつて、一緒に十五文だして食べ物を買ひました所が、あとでその金を拂はうといふ時になつて、鵙がいふのに、

『鵲はしがつくから七文だすことにしよう。そして鳩ははがつくから、八文だすことにしよう』。

といつて、自分は一文も出さなかつたといひます。

▼物はいひやうで角がたつ。

同じ心で、同じ事をいつても、その言ひ方で怒つたやうにも聞こえるし、又さうも聞こえぬ事があります。それですから人と話をするにもよく氣をつけて同じ事をいふにしても、なるべく人の氣にさからはぬやうにいふのが肝腎だといつたのです。

▼燃ゆる火に油をそゝぐやう。

『燃ゆる火に薪をそふるやう』ともいひます。

燃えてゐる火に油をそゝぎかけたり、薪をくべたりすれば、火は一層烈しく燃えます。これと同じやうに、怒つてゐる者に向つて、猶更その人の氣に入らぬ事をいつて、一層腹を立たすことをいつたのです。

▼門徒物知らず、法華骨なし、禪宗錢なし、淨土宗情なし。

門徒宗、法華宗、禪宗、淨土宗をのゝしつて、他の宗教を信心してゐるものがいふのです。

▼燒野の雉子夜の鶴。

親が子を思ふ心の厚いことをいつたのです。

雉子は大層子を愛して、巣の中で雛をそだてゝゐる時に、その野原がやけて來て、自分の巣もやけ身もやけてしまふやうになつても、まだ子をだいてにげることがなく、鶴も大層子を可愛がつて、夜の目もねむらず、子をそだでるといふ事からいつたのです。

＊　＊　＊　＊　＊

▼兇暴は貧から茶は鑵子から。

人が自暴自棄になつてしまふのも、多くは貧から來るといふのを、面白くいはんために、茶は鑵子からといふ語をそへたのです。

人は貧しくなれば、一層心をはげまして、つとめた後に、立派に世に立つてゆくやうにせなければならぬのに、貧しくなつて來ると遂にはやけをおこして仕方のない人間になつてしまふ者があります。よく注意して、こんな時には一層心をはげますのが必要です。

▼藪から棒。

だしぬけな事をいつたのです。話してゐる時に、突然それに關係のない事をいひ出したりするやうなのをいひます。

▼養老の泉を飲めば老人も若やぐ。

昔美濃國に一人の樵夫がありました。年よつた父につかへて、大層孝行でしたが、父は大の酒好きで、毎日酒をほしがつてゐました、しかし家は極貧乏ですから思ふやうに酒も買つてあげる事が出來ませんので、毎日山へいつて薪を伐り、之れを町へ持つていつて賣り、そのお金で酒を買つて來て、父にのませてゐました。

或る日いつもの通り、この樵夫が山へ行つて薪をきつてゐましたのに、石を踏みはづした拍子にたふれて、とう〳〵高い崖の上からころんで落ちました。落ちたまゝ暫くは氣絶してゐましたが、やゝあつて氣がつき、目を開いて見るとあまり大した傷もありませんので、大よろこびで起き上りますと、何となくその邊に酒の香がします。

『こんな山の中に酒の香がするとは不思議だ。何の香だらう』。

樵夫はかう思ひまして、その香のするもとを探しますと、つい近くにあつた瀧の水が、その香のもとなのでした。をかしい事だと思ひながら、瀧の水を手に掬つて一口飲んで見ますと、不思議も不思議、その瀧の水は酒の味と少しもちがつた事はなく、町にうつてゐる酒よりも、いくら味がよいかわかりません樵夫は大喜びて、早速その酒の水を汲んで持つて歸り、父に飲ませました所が大層うまい酒なので、父は大喜びをしました。これからといふものは、この樵夫はいつもこの瀧の水を汲んで歸り、父にすゝめました。

時の天子、元正天皇は、美濃の國不破の行宮におこしになつた時、この瀧を見に來られ、

『この瀧の水は、痛い所につければ痛は直になほり、この水の風呂に入ると白髪も黑くなるし、禿けてゐる頭も又再び毛が生える程、きゝめがある』。

とおほせになつたといひつたへて居ます。

この話の事から出來た語です。

▼夢に歸つて詩を見る。

昔支那に一人の書生がありました。妻を娶つて後大學にいつて勉强をしてゐましたが、長らく自分の家へは歸りませんでした。或る夜の事に、この書生は夢にその家へ歸つて行きました所が、妻が机に向つて筆をもち、せつせと詩を寫してゐますので、どんな詩だらうと思つてのぞいて見ますと。

數日相望極　須レ知意志迷
夢魂不レ怕レ險　飛過大江西

と書いてゐました。

こんな夢を見たものですから、不思議に思つて、その詩を書いておきました

すると暫くしてから家から手紙が來たので見ますと、その日附は夢を見たのと同じ時で、その中に妻の詩が一首書いてありましたが、それは夢に見たのと少しもちがつてゐませんでした。

▼雪の翌日は裸虫も洗濯。

『雪の翌日は乞食も洗濯』ともいひます。

裸虫といふのは、裸で居る程着物を持つて居らぬものゝ事をいつたのです。

雪が降つた翌日多くは天氣がよいものですから、かういふのです。

▼雪道と魚の子汁は後ほどよい。

雪の降つた日道を歩くのには、人が多く通つた後ほど歩き易く、又魚の子汁は鍋底になるほど味がよくなるものですからかう言ふのです。

▼遊女の誠と卵の四角なのはない。

遊女のやうな卑しい女は、口では誠がありさうにいつてゐて、如何にも眞實があると思はれても、それはたゞ口さきばかりで、露ほども誠がなく、又卵の四角なのはありませんから、かう二つを對照したのです。

▼油斷大敵。

道歌集に、

油斷をば大敵なりと心得て
堅固に守れおのがこゝろに

といふのがあります。

油斷をして居れば、思ひがけないひどい目にあつたり、しくじつたりして、

遂には身をほろぼすやうな事になるのをいましめたのです。

▼夕立は馬の背をわける。

夕立は少しの間でもその降り方に多い少いがあつて、馬の背でさへも、右と左とに降りやうがちがふ事があるといつたのです。

▼夢に牡丹餅。

思ひがけなく、大層喜ばしい事の出來て來たのにいふ語です。

▼よい時は馬の糞も味噌となる。

人が世の中で暮して行く時には、時々つゞけ樣に惡事が、出來て來たり、善い事があつたら、それからつゞけさまに、善い事が重なり合つて來るやうな事

が時々あるものです。

この諺はそれをいつたもので、運のよい時には何事をしてもよく成功するといつたのです。

▼用ある時の地藏顔、用なき時の閻魔顔。

地藏といへば、大層をだやかな圓滿な顔をしたもの、閻魔といへば見るからに恐ろしい顔つきをしたものです。

人に物を賴んだりしようと思ふ時には、極めてをとなしげな顔をしてやさしく出るかはりに、用事のない時には極めて無愛想なのをいつたものです。

▼夜があけたら巣を作らう。

梟などの言ばとして、なまける人のことをいつたものです。

梟などは、夜は目が見えますが、夜があけると目は見えなくなるのです。それで梟は、夜目の見えるうちは、

『夜が明けたらまた巣を作らう、夜の中はかうして遊んで居らなければならぬ』。

といつて、巣をこしらへもせず、さて夜があけると、目が見えませんから、巣を作ることは出來ず、かうして毎日々々なまけてゐるといふ事をいつて、なまくらな人の事をいつたものです。

▼能く泳ぐものは能くおぼる。

下手なうちにはしくじりませんが、上手になるとしくじるやうになる事をいつたのです。

水を泳ぐものは、下手なうちはよく氣をつけてゐますから、おぼれて死ぬや

うな事はありませんが、それがだん〳〵上手になつてなれて來ますと大膽になつて來て、注意をせぬものですから、おしまひに思ひがけない失敗をして、おぼれ死ぬやうな事があります。

何につけてもこの通りで、下手なうちはよく氣をつけてゐますが、上手になつてからしくじる事が多いものです。それで上手になればなる程、その事によく氣をつけてやらねばなりません。

▼夜半に嵐あり。

歌に、

明日ありと思ふ心の仇櫻
夜半にあらしの吹かぬものかは

といふのがありますが、これから出て來た諺で、油斷をしてはならないことを

いつたのです。明日は櫻を見にゆかうと思つてゐますと、その夜嵐が吹きあれて、櫻は全く泥の上に散つてしまつて、最早見にゆく事も出來ぬやうになるのと同じく、世の中の事は少し油斷をしてゐるうちに、もう取りかへしのつかぬ事になつてしまふ事があります。これをいましめたのであります。

▼夜目遠目笠のうち。

夜目といふのは夜ものを見ること、遠目といふのは遠い所にあるものを隔つた所から見ること、夜見たり、遠くから見たり、又笠の中に居るのを見ると、醜い人も美しいやうに見えるといつたのです。

▼弱身につけこむ風の神。

身體の弱つてゐる時には、よく風邪にかゝるものですから、かういつたので

す。又、弱点につけこんで、人のために利益をとられなどするやうなのにたとへていひます。

▼横紙破り。

無理なことをやる人をいふのです。

半紙などは、縦に破れば直ぐ破れますが、横にはどうしても眞直ぐには破れません。横に破つて眞直ぐにしようなどと思ふのは、思ふのが無理ですから、かういふ語が出來たのでせう。

▼餘桃。

昔支那に彌子瑕といふ人がありました。衞の君につかへて大層可愛がられてゐましたが、或る日君と共に庭を散歩した事がありました。その時彌子は、桃

の木になつてゐる桃の實を一つとつて食べて見ますと、大層甘かつたのですから、殘りの半分を君にさし上げました。すると君は、

『お前は大層忠義な者だ。お前の口を忘れてしまつてまでも、桃をくれるのか』。

といつて大喜びでした。ところが長らくしてから、この彌子は衞君の氣に入らぬやうになりました。そして、

『彌子はかつて食ひ餘しの桃を呉れるやうな無禮な事をした』。

といつて、とう〳〵彌子は罪におとされました。

▼落筆蠅を點す。

支那に曹不典といふ人がありました。この人は大層畫をかく事が上手でしたが、或る時孫權といふ人が、屏風に畫をかゝせました。曹不典は一心に畫をか

いてゐましたが、途中で誤つて筆をおとしましたので、屏風の絹に點がつきました。そこで曹不典はその點をもととして蠅を書いておきました。書が全くかけてから、孫權の前へもつて行きますと孫權は、その點をもとゝして書いた蠅を、ほんとうの蠅と思つて、手をあげてこれをうつたといふ事です。

▼爛柯。

碁にふける事を爛柯といひます。

爛は『くさる』こと、柯は斧の柄の事です。

昔支那に王質といふ一人の樵夫がありました。いつもの通り斧を持つて木をきりに山へ行き、石室山といふ山へ入りました。だん〳〵山の奥深く入つて行きますと、子供が數人かたまつてゐます。何をしてゐるのかと見ますと、それは碁をうちながら歌つてゐるのでした。質はもとより碁がすきなものですから

その傍へいつて一心になつて碁を見てゐました。この子供といふのは、その山にゐる仙人だつたのですが、この子供は、棗の種のやうなものをくれましたので、質はそれを口にふくんでゐますと、不思議な事にも、少しもお腹がすきません。

質は斧をそばに置いたまゝ一心に碁を見てゐましたが、暫くすると一人の子供が、

『なぜもう歸らぬのか』。

といひます。質はあまり長くゐてもわるいと思つて、歸らうとして傍においてゐた斧を持たうとしますと、その斧の柄はもうとくに腐つてゐます。びつくりして家へ歸つて見ますと、自分の村にはもう見知らぬ人ばかりでした。これは質が仙人の碁を見てゐて、まだ一日もくれぬと思つてゐるうちに、もう何百年もたつて、斧の柄にした木は腐つてゐるし、質と同じ時分の人は、もう皆死

んでしまつて、一人も居らなかつたのでした。

こんな話から、圍碁にふける事を爛柯といふやうになつたのです。

▼來年の事を言へは鬼が笑ふ。

はかない人の世の中に於て、明日死ぬともわからぬものが、來年のことなどいつて居れば鬼に笑れるといつたのです。

▼老婆心。

心配しなくともよいことを心配して、かれこれと人の身の上の事を氣づかつてやることをいつたのです。

▼樂は苦の種、苦は樂の種。

樂しみをむさぼつて働かず、安々と暮してゐるやうな事があればきつと後には苦しみがくるし、苦しいこともかまはず辛抱して、よく働きよくしのんで居れば、後にはきつと樂しいことが出來てくるといふのです。

世の中には、たゞ目の前のことにばかり氣がついて、行末までの事を思ふ者が少なく、また行末のことを思つてゐても、たゞ苦しいからといふので、樂々と暮したがるものがあります。このやうな人は後にはきつと、苦しくてたまらぬやうな暮しをしなくてはなりません。年よつてから後に、安らかに世を送らうと思ふ人は、若い時から十分に骨を折つて、仕事をし勉強をしておかねばなりません。

▼劉宗周口を慎む。

昔支那に劉宗周といふ人がありました。

この人が常々人に向つて言つてゐた事があります。

『大昔造化の神さまが人間をこしらへる時に、耳や目を二つにし、手や足も二つにしておきながら、たゞ舌だけを一つにしてゐるのは、何か考へる所があつたにちがひない。これはきつと多く見るやうに、多く聞くやうにそして又よく働くやうに、目耳手足を二つにし、言ふ事だけはなるべく少くさそうと思つて、舌は一つにしたにちがひない。おまけに舌は口の奥深い所におき、齒を以つて城のやうにし、唇でその城をとり圍んで郭のやうにし、鬚で戟でもつき立てゝそれを守つてゐるかのやうにしてゐる、これほどまでに取り圍んだ上にも取り圍んでゐるのは、中にもつてゐることを輕々しく口の外へ出さぬやうにしたのである』。

といつて、多言をいましめてゐたといふ事です、考へて見れば面白いことばではありませんか。人は口のために身をあやまるやうな事が隨分ありますから、

氣をつけねばなりません。

▼林蘊の磨頸。

死に至るまで節操をかへぬ事をいひます。

昔支那に林蘊といふ人がありました。大層賢い人でしたが、或る時劉闢といふ人が謀叛を起さうとしましたので、林蘊は大層心配して、色々とその惡い事をいつて止めましたが、劉闢は中々きゝません、きかぬどころでは無く大層腹を立てゝこれを捕へ、枷をはめて自由にならぬやうにし、牢屋にほりこみました。後になつていよ〳〵林蘊は刑に處せられるやうになりましたが、この時劉闢は、刀をもつて蘊を殺す役になつてゐるものに、

『お前はその刀で林蘊の首を磨り切つて苦しめて見よ。きつと降參して味方につくにちがひない』。

といひましたので、役人はその通りにしました。すると林蘊は痛いのをこらへて、

『おれを殺すのなら早く殺してしまへ。おれの首はお前らが刀を磨ぐ砥石でないぞ』。

といつて、中々降參はしません。

こゝに於て劉闢は、到底自分の味方にする事は出來ぬと思つてあきらめてしまひ、殺す事を止めてやつたといふ事です。この事から起つたのです。

▼流水腐らず戸樞螻まず。

よく働くものは健康なとの意味であります。

流水はいつも流れゐる水でありますから、腐るやうな事はなく、又戸のくるりは朝夕となく動いてゐますから、虫がくひません。

人も同じく、よく働いて居れば、血のめぐりもよく、氣もはれ〳〵して、身體は壯健でありますが、いつも安々とよわつてゐて、手足を動かす事も少いやうなものは、遂には身體がよわくなつてしまひます。

▼李下に冠を正さず。

李といふのは『すもも』のことです。

李の實のたくさんなつてゐる下で、自分の頭に手を上げて冠のいがんでゐるのをなほしなどしてゐると、人がももを盗まうと思つて、木の枝に手を上げてゐるのだと、疑ふやうな事があるから、李の木の下では、冠も正すなといつたので、人の疑ふやうな事は、さけねばならぬといつたのです。

▼綸言汗の如し。

綸言といふのは、天子の言ばをいつたのです。

汗は一度出たらもう二度と身體の中へ入りません。これと同じく帝王の命令などは、一度出たらもう取り消しは出來ぬといつたのです。

▼龍のあぎとの球を探るやう。

龍が口にくはへてゐる球をさぐつて、それを得ようとするのと同じく、あぶないことをやつて、大儲けをしようとするのにたとへたのです。

▼林中に薪を賣らず湖上に魚をひさがず。

林の中で薪を賣つた所が、だれも買ひ手のない事は知れたこと、又湖などの魚の多くとれる所へいつて、魚を賣りあるいた所が、これまたあまりよく賣れぬ事はきまつた事です。

この通り、物の多い所では、その物が珍しがられぬといふ事です。

▼梁上の君子。

盗賊の事を梁上の君子といふのです。

昔支那に陳寔といふ人がありました。若い時から大層學問がすきで、又徳のある人でした。或る縣の役人になつた事がありましたが、その徳になづいて百姓は皆心から喜び安心してゐました。この時の事ですが、或る時ひどい凶年があつて、米がとれませんでしたが、その年の或る夜、一人の盗人が陳寔の家へ入つて來て、梁の上にかくれて樣子をうかゞつてゐました。これを知つた陳寔は、直ちに起きて家内の者をその室に集め、

『人は誰れでも勉めて事をしていかねばならぬ。世の中で悪人だなどゝいはれてゐる樣な人でも、もとから悪い人であつたのではなく、悪い事をするの

が習はしになつて、おしまひにはその人の性質のやうになつたのである。皆あれを見てみよ、あの梁上に居る君子は丁度さういふ人であるのだ』。

といつてくれ〴〵も言ひきかせました。するとこれを聞いてゐた盗人大いにびくりし、直ちに下りて來て陳寔の前へ出て來て、しほれかへつて頭をたゝみにすりつけながら謝りました。

そこで陳寔は、

『お前の顔を見るのに全くの悪人でもないらしい。貧しい上に今年のやうな凶年だから、食ふ物がなくて仕方なしに盗みに入つたのであらう。これをお前にやらう』。

といつて、絹二匹をあたへました。

この事があつてから後といふものは、この縣にはたゞの一人も盗人がなかつたといひます。

▼良薬口に苦し。

良い薬は利き目はあるが苦くて大層呑みにくいのとおなじやうに、身のためになる言ばは、かへつて心に逆ふやうな事が多いといふ事です。氣に入らぬといつて、人が折角自分のためになる事を言つてくれてゐるのに、それをきかない人は、味が苦いからといつて良い薬をのまぬ人とおなじ事です。

▼類を以つて集まる。

君子は君子と集まり、小人は小人同士一緒になり、酒ずきの人は酒好きの人同士共になり易く、學問好きの人同士集まり易いといふことをいつたのです。善も悪も共に、同じ類の人同士が集まつて一緒になるといふ事です。

▼瑠璃も玻璃も照らせばわかる。

瑠璃玉と玻璃玉とがあつて、それを一目見た時には、どちらがよいか惡いか一寸見わけがつきませんが、よく見ればはつきりとちがつた所があつて、その區別がわかるといつたのです。

▼累卵よりも危し。

累卵といふのは卵をつみかさねた事で、いつどうなつてくだけるかもわからぬ、極めて危いことをいつたのです。その危い、つみ重ねた卵よりも、なほ一層危いといふのですから、大層危いことを形容したるのです。

▼遼東の豚。

昔支那の遼東に、豚を飼つてゐる一人の人がありました。或る時自分の家に飼つてゐる豚が、頭の白い豚を生みました。そこでこの人は大喜びで珍しい豚だと思ひ、このよい豚を天子様にさし上げたいと思つて、都の方へ上りかけました。その途中で、河東といふ處まで行くと、その邊に居る豚はみんな白い頭でした。

この話から、あまり珍しくもない物を自分一人珍しがつたり、大事にしたりするのを『遼東の豚』といふやうになりました。

▼魯酒薄くして邯鄲圍まる。

思ひがけぬ禍を被ることをいひます。

昔支那の楚國の王が多くの大名をよんだ事がありました。その時魯と趙の二國からは酒を献上しました所が、楚國の酒の事を司つてゐる役人が、趙の國を

憎んでゐたものですから、趙の國からもつて來た濃い酒を、魯からもつて來た薄い酒とかへて、この酒が趙からもつて來たものですと申し上げました。すると楚の王は、趙からもつて來た酒が薄かつたといふのを罪として、遂に趙を攻め、その國の首府の邯鄲といふ所を圍みました。

これから薄い酒のことを魯酒ともいふやうになりました。

▼我が頭の蠅を逐へ。

人の事をいふよりは、まづ自分の身を修めるがよいといふ事です。

イソップ物語にこんな話があります。

或るとき一疋の母蟹が子蟹に向つて、

『お前は何故そんなに横になつて歩くのだ、他の者がわきから見てゐるとも見つともなくて仕方がないよ。もつと眞直ぐに歩きなさい』。

といつて叱りました。すると子蟹は、

『お母さんが眞直ぐに歩けば私もまつ直ぐに歩きますよ』。

といつたさうです。

この母蟹と同じやうに、人はよく自分の惡い事などを棚にあげて人のことをよく彼れ是れいふものですが、人の事よりもまづ自分の惡い所を直すのが第一です。

▼我子には目がない。

親は我が子が無暗に可愛くて、我が子の惡しき事には氣がつかず、まるで盲も同然だといふ事です。

▼怜悧なる頭には閉ぢたる口あり。

賢い者は常に言をつゝしんで、むやみに口を開かぬといふ事です。

知らぬ事でも知つたやうに云ひたがつたり、何かにつけて、しやべりたがるやうな人には、きつと智識の淺い人、考の淺い人が多いものです。

▼禮すぐれば諂となる。

伊達政宗のいつた事ださうです。

禮儀といふものは、大層大事な事で、これがなければ人は世の中にうまく立つて行くことが出來ません。しかしその禮儀が、あまり度を過ごしますと、諂ひといふわるい事になつて來ます。

▼怜悧貧乏。

『器用貧乏』といふのと同じ意味なので、怜悧な者の中には、貧乏なもが多

いといふ事です。

必ずしも怜悧なものが貧乏するといふ事に限つてゐませんが、才のあるやうな人は色々な事をしたがつたり、種々な事業に手を出したりして、辛抱強くやることが少いから、こんな事をいつたのでせう。

▼隴を得て蜀を望む。

人の慾には限りがなくて、既に一つの事がらが出來れば、又その上の事をのぞむやうになるといつたのです。

一休和尚の歌に、

思ふこと一つ叶へば又二つ
三つ四つ五つ六つかしの世や

といふのがあります。この歌も意味はそれとおなじことなのです。

▼論語よみの論語知らず。

論語をよんでゐながら、それを身に行ふことの出來ぬものをいつたのです。世の中にはよくこんな事があつて、口では隨分よい事もいふし、理屈もいひますが、さてその人の行ひはどうかと見ると、口でいふ事とは反對に、人から笑はれるやうな事をやつてゐるものが多いものです。この諺はそれをのゝしつていつたのです。

▼論より證據。

かれこれ口で爭ふよりも、實際のことが十分の證據になるといふ意味です。

▼我が家の佛尊し。

他によい物があつても、それをよいとせず、他に尊ぶべきものがあつてもそれを尊ばず、只自分がこれまでからよいと思つてゐるものばかりをよいとし、これまでから尊んでゐるものばかりを尊ぶのをいつたのです。これは廣く世間の事を知らぬ頑固な心から、かういふ事になるのです。

▼我が刀で首きる。

自分のもので自分をくるしめたり、自分で自分の苦しむやうなことをするのをいひます。

▼若木の下で笠をぬげ。

又、『若木に腰をかけるな』ともいひます。

自分より年の下の者だといつて、侮るやうな事をすなといふ意味の諺です。

年下の者だからといつて侮ると、その年の下な者は、年がゆくにしたがつてどれ位出世するかも知れぬし、又どれ程立派なものになるかもわかりません。それで年が下だからといつて、その者を見下げたり、侮つたりしてゐた時には後にその者が出世した時に、自分が大層はづかしく思はねばならぬやうな事があります。

『若木をつめるな』といふのも同じ意味の諺です。

▼我が田に水引く。

自分勝手の事をしたり、言つたりすることです。

農夫が田に水を入れるのに、隣りの田などの他人の所へは少しも水を入れず自分の田にばかり水を入れる所から、いつた事です。

後京極良經公の歌に、

小山田の苗代水のひき〳〵に
わかつや人のこゝろなびらむ

といふのがあります、この通り、人の田へ水をわけてやるやうに、人に利益をあたへるのが、ほんたうの人の情といふものです。自分勝手の事ばかり、したり言つたりしてゐては、世の中はうまく暮らして行けません。

▼我が身をつめつて人のいたさを知れ。

慈鎭和尚といふ人の歌に、

誰れもみな我が身をつみて思ひ知れ
いのちは惜しきものと知らずや

といふのがあります。

我が身をつめつて見て、痛かつたならば、人もまた同じやうに痛いのはわか

つた事なのですから、自分の痛いことから考へて、人を思ひやり、自分のつらい事を思つて、人をつらい目にあはさぬやうに氣をつけねばなりません。

▼藁千本あつても柱にはならぬ。

藁のやうな弱いものが、幾百本あつても幾千本あつても、柱のかはりせぬことはきまつた事、これと同じく役に立たぬ人が何人あつたところで、立派な仕事は出來ぬといふ事です。

▼笑ふ門には福來たる。

一家和合して、中よく暮し、笑ひごゑが常に外にきこえるやうな家は、幸福であるといふことをいつたものです。

＊　＊　＊　＊　＊

▼猪武者。

源平の戰ひの時の話に、梶原景時といふ人が、源義經に向つて逆櫓をこしらへることをすゝめました。逆櫓といふのは、船を後へ退かすやうに、即ち船を逆にやるやうにこしらへた櫓です。この櫓をつけておけば、進んでゐた船をはやく退かすのに都合がよいから、景時はすゝめたのです、所が、強い大將の義經は、

『何、兵士がはじめから後へ退く用意などしなくてもよい。戰ひには進みさへすればよいのだ』。

といつて、景時の計を用ひませんでした。それで景時は義經のことを『猪武者だ』といつて、惡口をいつたといふ話があります。

猪、といふものは、進みかけたらば、一方ばかりへ進んでふり向きさへせぬ

といふ事です。それで向ふいきの強いもの丶事を、かういひます。

▼井の中の蛙。

井はせまい所、そんな中にゐる蛙は、只井の中ばかり見てゐますから、他のひろい所は少しも知つてゐません。こんな所から、少しの事、狭いことばかりより知らないもの丶事を、井の中の蛙といひます。井の中の蛙大海を知らずともいひます。

▼猿猴月をとる。

慾ぶかくて、慾のために命を捨てるのを言ひます。又愚な人が、身分にふさはぬ事をやらうと思つて、却つて不幸な目にあふ事にもいひます。

昔或る所に五百匹の猿がゐました。或る夜月の出てゐる時に、一匹の猿が木

の上にゐますと、丁度その下に井があつて、その中の水に月が映つてゐました赤いまんまるい美しい月の影を見たその猿は、どうかしてそれを取りたいものだと考へました。そして多くの友猿を呼んで來て、皆で手と尾とを繋ぎあはせて鎖のやうになり、一方の端は猿の木の枝につかまり、他の一方の端の猿が井の中へ入つて月を取る事にしました。まづ一匹の猿が木の枝につかまつて下りますと、次ぎの一匹がその尾をもつて繋がり、だん〳〵長くなつて、井戸の中まで猿の鎖がとゞくやうになつた時に、木の枝が折れてしまつて、皆一度に井へ落ちて死んでしまひました。

▼笑の中の劍。

惡い心の人の中には、顔ではいかにもなれ〳〵しく、その人にしたがつたやうにしてゐて、さて蔭へまはつては、その人のわる口をいつたり、わるい事を

考へたりするやうな人が、隨分あります。口でうまい事ばかりいひ、その人の氣に入るやうにしておいて、蔭では惡口をいふやうな人もあります。衣笠内大臣の歌に、

何事を思ひけりども知られじな
ゑみの中にも刀やはなき

といふのがあります。

▼遠慮ひだるし伊達寒し。

遠慮して居れば、隨分食ひたいものにも手を出さずに居なければならぬし、多く食ひたいものも、少し食べて辛抱して居らねばなりません。又むやみに着物をきれいしたり、姿をよくしようと思つたりすれば、時々は寒いのを辛抱して居らねばなりません。諺に、

『伊達の薄衣』。

といふ通り、身をかざるものは時に寒いのをこらへねばなりません。これからいつたことわざです。

▼男の心と大黒柱は太い上にも太いがよい。

男子の心が小さいやうな事では、何んな仕事をした所が少しも成功せぬ事はきまつた事、太い上にも太い心を以つて、どんな難儀な事にも弱らぬといふ風でこそ、はじめて立派に仕事が出來るのです。

又、

大黒柱といふものは、家の中心になつてゐて、その家をもちこたへねばならぬものですから、細くて弱いやうな事ではいけません。太い上にも太いのが、その家の丈夫なわけです。

それで男の心と大黒柱とは、二つながら太いがよいといふ意味です。

▼驕るもの久しからず。

平家三十年の繁榮も夢の間に、源氏の旗風にうちなびいて見るかげもなく亡ぼされてしまひました。心にをごる所があつて、人に高ぶつたりなどするやうな人は、きつと長くはたもてません。いつの間にかおちぶれてしまつて、見るかげもなくなつて、人にあはれまるやうになつてしまひます。

又儉約をせず、むやみに入らぬ金づかひをする人もその通り、幾萬幾十萬の財産があつても、すぐに破産してしまつて、人のお世話にならねばならぬやうになつてしまひます。

▼岡目八目。

これは圍碁のことばから出て來たのです。

岡目といふのは、傍から見てゐる目のことで、諺の意味は、碁をうつ側から見てゐるものは、碁をうつてゐるものよりも八目ばかりは強いといふのです。

何事でもこの通り、自分のやつてゐることは、惡いことでも、中々氣のつかぬもので、知らず知らず惡い事をしたり、人から笑はれるやうな事をしてゐるものですが、さて人の事を見ると、少しの惡いことでもよく目について、それをかれこれ云ひたがるものです、人のことを見て、若しその人のすることがわるいと思へば、その人のことを云ふよりは、まづ第一に自分の行ひをかへり見みるのが肝腎です。

▼尾をふる犬はたゝかれず。

犬が人をなつかしがる時には、尾をふつてあまへるがやうに、人につきまと

はるものです。

なれ〳〵しく自分になつて來るものを、たゝくやうな、むごい事はしられぬといふ事。

▼斧を磨いで針に作る。

昔支那の李白といふ人が、象宜山といふ山の中で書物を讀んで勉強してゐました。まだ十分は勉強もせずに、遂に倦んで出て來かけました。道で一つの谷川の近くを通りますと、一人の年よつた婆さんがたゞ一人、せつせと斧を研いでゐます。李白は不思議に思つて、

『お婆さん、あなたはそんなものをせつせと研いで、どうするつもりなのです』。

と問ひますと、その人は、

『これをかういふ風に研いで針にしよう思つて、かうしてゐるのです』。

これを聞いた李白は大いに心をとり直して勉強し、遂には名高い人となりました。

これに似た話が日本にもあります。

近江國に磨針峠といふ山があります。昔或る青年が京都へいつて勉強してゐましたが。中途で、學問がむつかしくて、思つてゐる通りに行かぬものですから、とう〳〵學問を半途で止めて國へ歸りかけました。所が此の山に來かゝりますと、山の中に一人の年よりが居て、せつせと斧を磨つてゐます。この書生は不思議に思つて、その譯をたづねますと、かうしてこれを針にしようと思ふのだと答へました。そこでその書生は大層感心し、自分の心の弱かつたのを恥かしく思ひ、京都に引かへして大勉強をし、遂に立派に成功したといふことです。

▼小田原評定。

豐臣秀吉が朝日の昇るやうな勢で天下の英雄をなぎたふし、最早殘つてゐるのは相模の北條氏その他極めて僅かなものとなつてしまひました。そこで秀吉は大軍を率ゐて、いよ〳〵相模を攻めました。この時の北條氏は、氏政で相模の小田原城によつてゐましたが、豐臣の大軍が攻めて來るといふので、直ちに城内で大將どもを集めて、相談をしかけましたところが、皆の云ふことがまちまちになつてゐて、

『あの強い秀吉の大軍に攻め込まれては、とてもかなはぬから、早く降參するがよい』。

といふものもあれば、

『いや、たとひ城を枕にして討死しても、北條氏の名折れになるから降參

などはすまい、どこまでも潔よく戰つて死なう』。

『なに、味方は少くても關東の兵者だ、戰つて勝てぬといふ事はない』。

と力んで、戰爭を言ひはるものもあれば、又一方には早く降參する方が、北條氏の爲めによいと言ふ者もあり、なか〳〵直ぐには相談がまとまりませんでした。

この事から、何や彼やと色々な話が出て、長々ときまりのつかぬ相談の事を小田原評定といふやうになりました。

故事俚諺 **教訓物語**（終）

大正元年十月一日印刷
大正元年十月十日發行

教訓物語

定價金五拾五錢

著作者　森脇紫逕
發行者　大阪市東區安土町四丁目十二番地　武田福藏
發行者　東京市神田區美土代町三丁目一番地　富田能次
印刷者　大阪市南區三津寺町三十三番地　山本彌之助

不許複製

發賣所

大阪市東區安土町
振替大阪四一〇九番　武田交盛館
東京市神田美土代町
振替東京三三〇七番　富田文陽堂

森脇紫逕編

青年修養と娯樂

冊壹全本美裝洋形新最

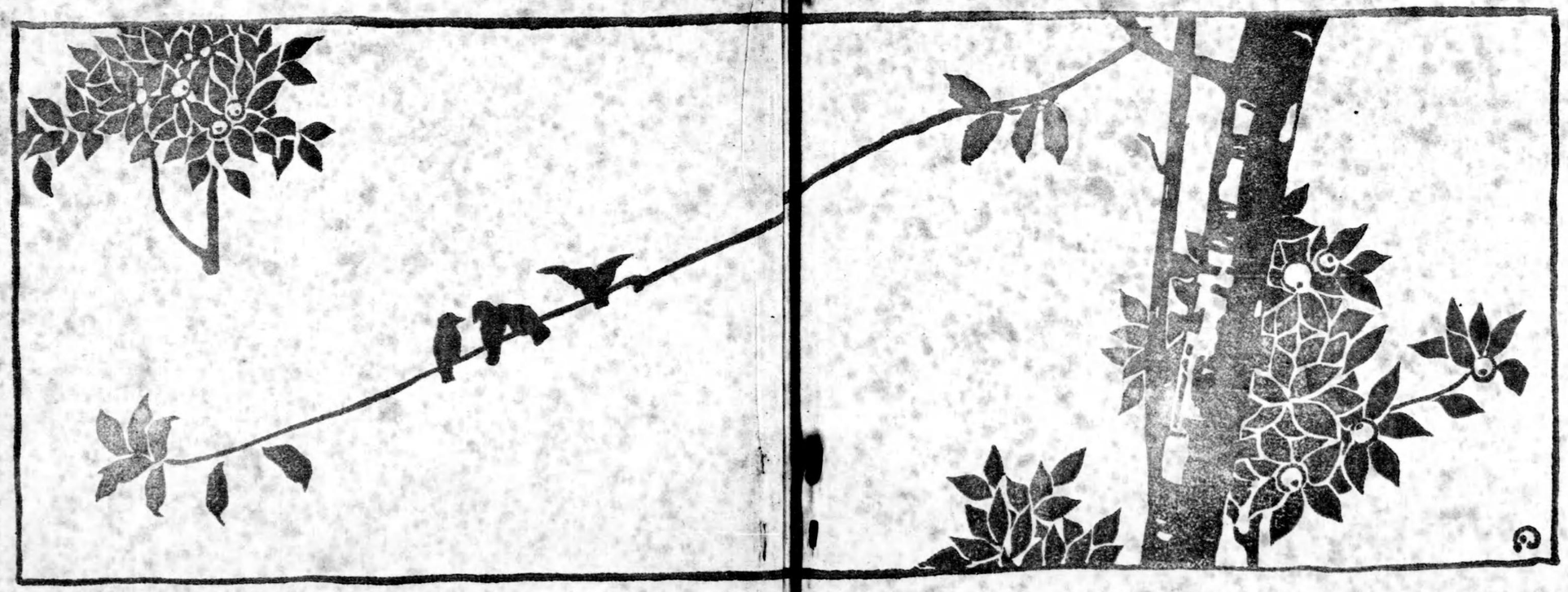
《定價金五拾五錢》

良藥は口ににがくして飲むにたへず、美味なる河豚の肉には毒ありと聞く。本書は河豚の肉に良藥のさゝ目をもたせて、青少年學生諸君の頭腦の食物たらしむべく現れたるものなり。眞面目といはず滑稽といはず、高尚といはず卑俗といはず、すべて修養となり娯樂となり、時に思はず洪笑する事あり、一讀胸に針す。其膳立の樣々本書に就て見給へ。

發行元　武田交盛館

大阪市東區安土町
振替大阪四一〇九

269
639



終